

県の溶融炉施設が破たん

鈴鹿市のゴミ焼却灰搬出先はどこに？

鈴鹿市清掃センターは「もやせるゴミ」を焼却処理していますが、そこで発生した焼却灰は、四日市市小山町の「三重県廃棄物処理センター」へ運ばれ、「ガス化溶融炉」で溶かされて建材などに使用されています。鈴鹿市からの搬出量は、毎年7500トン前後です。

今年3月に、県廃棄物処理センターは累積赤字が増大し、もう来年度には操業ができなくなるとの、見通しを明らかにしました。センターを利用している鈴鹿市など17市町は、焼却灰を持っていく先がなくなり、来年度からの処理の方法について再検討を迫られています。

最初から赤字、料金値上げを重ねた末の破たん

このセンターは2002年12月から処理を開始、最初の処理料金はトン当たり2万円でしたが、初年度から赤字を出し、06年には2万8千円に値上げ、さらに08年には3万5千円プラス灯油値上がり分7千円、実質4万2千円に値上げ、という経過をたどりました。

県は当時の北川知事のもと、市町村の仕事であるゴミ処理に介入し、RDF発電と溶融炉の2本立てで広域に処理する方式を市町村に押し付けました。鈴鹿市はRDFには参加しませんでした。溶融炉での灰処理は自前の施設を作らず県のセンターに参加しました。その理由は「安くあがるから」。県は市町村を巻き込むために、採算の見通しもないのに処理料金を「1万5千円」と説明したのです。ところが、スタート時点で早くも「2万円」に引き上げ、操業が始まるとたちまち赤字が累積し、その後も2度の値上げを重ね、最初の説明の2倍以上という、法外な料金にしてしまいました。この経過から見ても、県が市町村をペテンにかけたことは明らかです。（2面に続く）

鈴鹿市は毎年 1 億円以上の出費増

このような県のデタラメな、詐欺的な料金値上げによって、鈴鹿市は年間 2 億円もなかった処理料金が、06年に2億円を超え、08年には3億円を超えるという損害をこうむっているのです。その責任は、最初から数字をごまかし市町村を意図的にだましてきた県にあります。

このような経過をたどっての行き詰まり、破たんの責任は当然、県が負うべきものです。今後の焼却灰処理の行く先についても、県は責任を持って対処すべきですし、もし自治体の負担がさらに増えることになれば、県も応分の負担をすることが当然です。

児童虐待、なぜ止められなかった？

5月20日の文教福祉委員会で、鈴鹿市で起きた児童虐待事件の経過について質問しました。教育委員会は、子どもの様子がおかしいとの学校からの情報をその都度、市子育て支援課・子ども家庭支援室と県北勢児童相談所に連絡していたし、市もたびたび家庭を訪問していたとのことでした。それなのに、小1の児童が重体となったことを止められなかった原因は何か？

委員会で聞いている限りでは、市と教委は実態をつかもうと努力を重ねていたが、いちばん権限を持つ児童相談所が、市から要請をしてもなかなか家庭への訪問をしなかった、という点が重大であると感じました。

鈴鹿市では、2003年にも幼児が虐待で死亡するという事件があり、その反省から虐待防止の連携した態勢をとってきたはずでしたが、その教訓が生かされませんでした。今度こそ、二度と同じ失敗を繰り返さない態勢づくりを願います。

後援会で、豊田・岡崎へ行きました

恒例の鈴鹿市後援会の春のバス旅行、今回は5月23日、トヨタ博物館、三州足助屋敷、八丁味噌工場を、バス2台で訪ねました。雨模様ではありましたが、皆さんと楽しく一日を過ごしました。

次回は秋、バスの都合で11月14日（日）を予定しています。行先や内容については、また後援会で相談しますが、ご希望や提案があれば、後援会役員か市議団までお寄せ下さい。

京都・鞍馬寺の「平和の祈り」

市役所OB会のバス旅行に参加して、京都に出かけました。都の北部、賀茂川の上流の山中にある鞍馬寺は、牛若丸（源義経）伝説で知られています。本殿金堂に入ると、参拝者に向けて次のような文が掲示されていました。

その昔 一の谷 屋島 壇の浦
戦いのむごさ むなしさに気づき
戦って戦って戦った義経は
平泉では戦いませんでした

すこし前 真珠湾 硫黄島 沖縄
戦争の悲惨さ 理不尽さを知り
戦って戦って敗れたわが国は
永久に戦わないと誓いました

戦争で悲しまないために
平和の道を目指したのです
「日本国憲法」は平和の基盤
戦争で悲しませないために
日本が世界に誇れる宝です

テロはやめよう 戦争もやめよう
真の平和を願って ひたすら祈ろう
無慈悲で残酷だ
鞍馬寺

消防庁舎など、異常な安値の入札

6月議会にいくつかの契約議案が出されていますが、その多くがびっくりするほどの安値で落札されています。安ければ市の予算は大いに助かりますが、仕事をする請負業者の方は大丈夫なののでしょうか？ 下記のうち、白子小屋内運動場以外は、設定された最低制限価格（85%）をも大きく下回っています。

	予定価格	落札価格	落札比率
新消防庁舎建築工事	1,176,744千円	755,000千円	64.16%
同 機械設備工事	236,515千円	158,800千円	67.14%
同 電気設備工事	256,859千円	171,239千円	66.66%
地域防災情報システム 整備工事	245,837千円	157,000千円	63.86%
白子小屋内運動場 増改築工事	264,916千円	252,000千円	95.12%

ずいそう



暮らしの中を走る電車

今年の1月下旬に、議会改革特別委員会で出雲市・松江市の視察に出かけたが、1泊2日の強行日程のため、出雲市役所と松江市役所に行った以外は列車に乗りっぱなしで、車窓から宍道湖などの風景を眺めただけだった。

いま上映中の「レイルウェイズ」は、この出雲と松江の間を走る地方鉄道「一畑電車」と、その運転士が主役である。この映画を観て、せめて両市間の移動をJRでなく一畑電車にしたら良かったのになあ、と残念に思った。古い電車と古い駅舎、すばらしい風景が全編を流れていた。

ゆったりと走る電車と、人間らしい生活

主人公・筒井は49才、大企業のエリートとして順調に出世、非情なリストラも仕事として進める。しかし、リストラとなった親友は死に、筒井の家庭も崩壊寸前。そんな時、故郷・島根に暮らす母親が倒れる。ここで筒井は人生の大転換をはかり、大企業を退職して故郷に帰り、子どもの頃の夢だった「一畑電車の運転士」に挑戦する。

電車はゆったりと、筒井の自宅の前、畑の中を通り、母親の病室の窓の下を走っていく。運転士となった彼の表情は、エリート社員としてキリキリしていた時とは全く違う、落ち着いた優しい表情になっている。競争社会の中で走り続け、クタクタに疲れた日本人に、「本当にやりたいことをやってるかい？」と優しく問いかける映画である。

ローカル電車は、暮らしの中をゆっくりと走り、庶民の生活を支える足として活躍している。競争原理や効率という概念とはちがう、乗っただけでホッとする「人間的」な乗り物である。

わざわざ島根まで行かなくても、この三重県に、「もうここにしかない」という電車がある。作家・関川夏央氏が「文芸春秋・季刊夏号」で紹介している、近鉄内部・八王子線と、三岐鉄道北勢線である。この路線は、大正時代に広まった「軽便鉄道」の生き残りで、レール幅(軌間)762ミリという全国一の小さい電車である。すぐ近くなのに、めったに乗ったこともないが、一度1日かけて沿線風景を眺める小旅行などしてはどうか。発見できるものが、いろいろあるような気がする。